

## 序 文

福祉国家の危機が叫ばれて久しい。現在日本では、終身雇用制度が動揺し、非正規雇用が普及する中で、格差社会化が進行している。それに急速な人口の高齢化も加わって、従来の社会保障システムはますます機能不全に陥っている。日本のみならず、多くの先進諸国でも社会保障システムの再編は衆目一致の課題となっている。そうした中で、これまでの歴史を振り返り、社会が様々な生活保障の問題にどのように対処してきたかを見ることは有意義なことであると考ええる。

本特集号のテーマは、フィランソロピーの国際比較であり、主として19世紀から20世紀にかけて、特に貧困問題に対し、イギリス、ドイツ、スウェーデン、ロシア、日本がどのように取り組んできたかを、フィンランソロピー（民間慈善）に焦点を当てて検討する試みである。対象とする時期は、まさに福祉国家が出現しようとする時期であり、必ずしも国家が国民の福祉に責任を持つとは考えられていなかった。言い換えれば、国家と市民社会の間でどのような役割分担がなされるべきかの認識に大きな変化が現れる時期であったのである。それゆえに様々な可能性が提起され試みられたとあってよい。そのプロセスを検討することは、福祉国家が歴史的にどのように成立したかを見る上でのみならず、現行の社会保障システムの意義と限界を広い歴史的視野の下に位置づける上でも重要となると考える。一方、その役割分担の認識は、国家と市民社会それぞれの性格やそれらの相互関係に規定され、国により共通性や差異が見られたと想像される。そのような観点から見ると、フィランソロピーに注目することは、それぞれの国の国家と市民社会、あるいはそれらの相互関係の特質を浮き彫りにすることにつながるのではないかと考えられる。本特集号は、以上のような問題関心のもとに成り立っている。

イギリスを扱っているのは、岡村東洋光論文と小野塚知二論文である。小野塚論文は、19世紀に集団的自助の組織として発展した労働組合における慈善 (benevolence) 活動に着目し、それがどのようなものであったかを明らかにするとともに集団的自助と慈善との関係を検討して、労働組合の立場から公と私の問題に接近している。岡村論文は、19世紀後半に活躍したクエーカー教徒の実業家ジョーゼフ・ラウントリーと、彼が設立し、今日でもイギリス最大級の民間独立財団として様々な活動を行っている3つのトラストに焦点を当て、イギリスにおける公と私の相互関係の特質を照らし出している。

馬場哲論文は、ドイツを対象とし、19世紀末葉から20世紀初頭にかけてのフランクフルト・アム・マインにおける都市と公共慈善財団との関係を分析する。特に都市計画の実施を通じて両者の結びつきが強まる過程に着目し、都市の近代化に公共慈善財団の所有地が重要な役割を果たすとともに、行政に促された土地管理が財団本来の慈善・福祉活動の財政的基盤を強化したことを明らかにしている。

スウェーデンを対象とした石原俊時論文も、馬場論文と同時期のストックホルムの状況を扱っている。慈善調整協会による民間慈善の組織化の試みは公的救済の再編とほぼ同時に進行したのであり、当時実施された社会政策の多くが現実的に機能する上で、こうし

て成立した民間慈善と公的救貧との協力関係の存在が不可欠であったことを示している。

これらに対し、ロシアを対象とした高橋一彦論文は、19世紀末に進行した国家が社会事業を推進する「国家福祉」の構想に対し、民間慈善と地方自治体の救貧事業が「地域福祉」としてこれに対する対抗軸を形成したことを、モスクワにおけるフィランソロピーの展開過程を紹介しながら明らかにしている。このような対抗軸の在り方を検討することを通じて、例えば、公的救貧制度がそれまでに殆ど展開を見なかったなど、ロシア独自の状況が浮き彫りにされるであろう。

日本を対象とした大杉由香論文は、日本におけるフィランソロピーの明治以来の歴史的展開とその特色を通時的に把握しようとしたものである。欧米と日本との対比を主眼としたこの論文は、本特集号に掲載された他の諸論文が扱っているヨーロッパ諸国での経験を、より広い空間軸・時間軸の中に位置づける視点を与えてくれる。

本特集号の執筆者は、政治経済学・経済史学会の福祉社会研究フォーラムや都市経済史フォーラムおよびフィランソロピー研究会（代表：岡村東洋光）のメンバーである。執筆者は、これらの研究会に重複して参加してきた。また、殆どの研究会の会合は、東京大学の経済学研究科棟で行われ、研究成果の一部は、大学院経済学研究科の経済史研究会（ワークショップ）でも発表された。本特集号に掲載されている論文は、経済学研究科を中心としたこのような様々な研究活動の交錯の中で生み出されたものである。本特集号の公刊がさらなる研究の進展につながることを期待している。

「特集号」編集責任者  
石原 俊時